

文化遺産国際協力コンソーシアム第34回研究会

学校教育と 文化遺産



©トラランカレカ考古学プロジェクト

2024.9.28 [土]

13時～17時 (12時30分開場)

会場

東京文化財研究所 地階セミナー室
(東京都台東区上野公園13-43)

主催：文化遺産国際協力コンソーシアム、文化庁



文化遺産国際協力コンソーシアム第34回研究会

学校教育と文化遺産

2024.9.28^[土] 13時～17時
(12時30分開場)

目次

開催趣旨	2
プログラム	2
講演要旨	3
パネルディスカッション	7
登壇者プロフィール	8

開催趣旨

近年、文化遺産国際協力の現場では、国際協力をする側から一方的に知識や技術、資材等を供与するのではなく、対象の文化遺産の保護を担う側(カウンターパート)や文化遺産に関わる様々な人々(ステークホルダー)と相互に連携して持続的な活動とすることの重要性が強く意識されるようになっていきます。そうした中で、とくに児童生徒の教育に文化遺産を組み込むことが、文化遺産保護の足腰を強化する手段、あるいは効果的な国際協力の活動の一つとして注目されるようになっていきます。

本研究会では、将来世代に対する文化遺産への認識の醸成や、国際理解の促進、持続可能な地域社会づくりへの貢献等につながるような国内外の事例を紹介しながら、初等教育・中等教育を中心に、学校教育が文化遺産国際協力に果たす役割、その方法論や課題等について議論します。本研究会を通して、文化遺産国際協力と学校教育の関係にあらためて目を向け、その意義を共有することで、今後の活動の一助となることを期待しています。

プログラム

13:00-13:05	開会挨拶 ●青木 繁夫(文化遺産国際協力コンソーシアム副会長)
13:05-13:10	趣旨説明 ●文化遺産国際協力コンソーシアム事務局
13:10-13:45 講演1	第4学年社会科学習の実践「残したいもの 伝えたいもの～白川村荻町集落～」 ●澤之向 達也(岐阜市立加納小学校 教諭／前 白川村立白川郷学園 教諭)
13:45-14:20 講演2	後期中等教育における文化遺産教育の意義と課題 —京都芸術大学附属高等学校プロフェッショナル科目「歴史遺産」の選択と進路— ●増淵 麻里耶(京都芸術大学 芸術学部 教授)
休憩10分	
14:30-15:05 講演3	ポピュラーカルチャーで学ぶ郷土史と文化遺産の保護 —メキシコ農村部における学習マンガの導入とその効果— ●小林 貴徳(専修大学 国際コミュニケーション学部 准教授)
15:05-15:40 講演4	アンコール遺跡における文化遺産シェアにむけての普及教育活動 ●丸井 雅子(上智大学 総合グローバル学部 教授) ※ビデオ講演
休憩15分	
15:55-16:55	パネルディスカッション ●モデレーター：關 雄二(文化遺産国際協力コンソーシアム副会長) ●コメンテーター：五月女 賢司(大阪国際大学 国際教養学部 准教授) ●パネリスト：澤之向 達也、増淵 麻里耶、小林 貴徳
16:55-17:00	閉会挨拶 ●關 雄二

第4学年社会科学習の実践 「残したいもの 伝えたいもの～白川村荻町集落～」

澤之向 達也

(岐阜市立加納小学校 教諭／前 白川村立白川郷学園 教諭)

本発表は、岐阜県大野郡白川村にある世界文化遺産「白川郷荻町集落」を教材化した第4学年社会科学習の実践紹介である(R3.10の実践)。合掌集落を保存するための住民憲章(保存三原則「うらない、かさない、こわさない」)は「白川郷荻町集落の自然環境を守る会」を中心に50年間守られてきた。人口減少及び高齢化が進む中、近い将来、合掌造りが空き家になってしまうことが予測され、この保存三原則の見直しが検討されている。この事実を社会科学習の授業で取り上げ、将来において合掌集落を守り続けるために、自分たちに何ができるか主体的に地域の今日的課題に関わろうとする子どもの姿を目指すことに挑戦した。

また、白川郷学園の特色である地域との連携を紹介する。地域との連携を図った様々な体験的な活動や地域人材の活用等、子どもたちが地域の魅力(文化遺産、自然、人の生き方等)をより身近に感じられるように講じた工夫についても発表する。

MEMO

後期中等教育における文化遺産教育の意義と課題 —京都芸術大学附属高等学校プロフェッショナル科目 「歴史遺産」の選択と進路—

増渕 麻里耶

(京都芸術大学 芸術学部 教授)

多くの子どもたちが当事者意識をもって自らの将来について悩みはじめる高校時代、ロールモデルとなる大人との出会いは、その後の人生に大きな影響を与える可能性がある。このような観点のもと京都芸術大学が高大連携の一環として協力する同附属高校「プロフェッショナル科目」は、各分野の第一線で活躍する大学教員が高校生と直接ふれあい、プロの世界の実状について語るとともに、ワークショップ形式の能動的な学びを通して、生徒たちの進路に対する視野を広げる集中授業である。これまで同大学芸術学部歴史遺産学科は、民俗文化財保存修復、文化財科学、考古地理学などの分野で授業を実施してきた。

本発表では、いくつもの選択肢から「歴史遺産」クラスを選んだ生徒たちの文化遺産についての現状の意識、そして受講後の変化について報告を行う。そして、そのような教育を受けた生徒たちが、その後の進路選択にどのように向き合っていくのかについても紹介する。

MEMO

ポピュラーカルチャーで学ぶ郷土史と文化遺産の保護 —メキシコ農村部における学習マンガの導入とその効果—

小林 貴徳

(専修大学 国際コミュニケーション学部 准教授)

本発表は、メキシコの農村社会に存在する問題を解決・改善する試みを紹介するものである。ここで指す問題とは、公教育の歴史科目における郷土史の不在という問題であり、それは、地域の文化遺産に対する住民の関心の低さという問題と無関係ではない。研究対象とする農村の郊外には古代の遺跡があり、2012年から考古学者による研究調査が実施されている。その調査成果をできるだけ親しみやすいかたちで地域住民に示すこと、また、公教育の歴史科目で身につける知識と郷土史や文化遺産の節合すること、それが学習マンガの開発と導入のねらいである。

学習マンガの開発・導入が、生活のなかに新たな学びの機会を提供するという展望を示すため、本発表では、地域住民に対する聞き取り・アンケート調査で得られたデータの分析を提示する。地域住民が日常生活で遺跡とどのように結びついているのか、その経験や予備知識の実態を明らかにするとともに、公教育の歴史科目に潜む問題を浮き彫りにする。

MEMO

アンコール遺跡における 文化遺産シェアにむけての普及教育活動

丸井 雅子

(上智大学 総合グローバル学部 教授)

本発表では、カンボジアのアンコール遺跡群において上智大学アジア人材養成研究センターが1999年から実施してきた遺跡の普及教育活動について、これまでの経緯を紹介すると同時に現代カンボジアにおける文化遺産教育の意義と課題を来場者の皆様と共有したい。遺跡発掘や修復現場の現地説明会に加えて、遺跡をめぐる伝承絵本の作成、体験や学びを分かち合う世代間対話の会など様々な「文化遺産シェア」(加藤2018[※])とも言うべき試みが展開している。こうした取り組みは有形の文化財建造物が優位に立つアンコール遺跡群地域への、ささやかな文化遺産価値観への問い直しであり、学校教育を通じて次世代に託すもうひとつの地域共同型の文化創造へと繋がることを期待している。

※加藤幸治『文化遺産シェア時代：価値を深掘る"ずらし"の視角』社会評論社、2018

MEMO

コメント

五月女 賢司

(大阪国際大学 国際教養学部 准教授)

文化遺産国際協力と学校教育の連携について、いくつかの考えを共有する。国際協力の枠組みが変化し、教育の重要性が再認識されていることは、非常に重要である。かつての国際協力は一方的な支援が主流だったが、現在では文化遺産の保護に多くのステークホルダーが共同で取り組むことが求められている。この転換は持続可能な価値保護に不可欠であり、長期的な成功の鍵である。

特に、児童生徒に文化遺産を教育することが注目されている。文化遺産は単なる過去の遺物ではなく、未来を担う若い世代にその価値を伝えることが、持続可能な社会の形成や国際理解の促進に繋がる。学校教育で文化遺産を教えることで、生徒たちは自らの地域や世界の文化財を理解し、尊重する心を育てることができる。これは、次世代が文化遺産の未来の保護者となるための重要なステップである。

また、学校教育を通じて文化遺産国際協力の意識を高めることは、地域社会の持続可能な発展にも貢献する。地域の文化遺産が次世代に引き継がれ、地域の活性化にも寄与する可能性がある。しかし、この実践にはカリキュラムの開発、教員の訓練、地域の理解と協力といった課題も伴う。

このような課題に取り組むために、過去20年間の批判的遺産研究(Critical Heritage Studies)の枠組みが有益であるかもしれない。例えば、遺産は単なる「モノ」ではなく、社会的・文化的なプロセスであるという考え方がある(※)。この文脈で考えると、筆者が地域の協力を得て大阪の吹田市立博物館で収集・展示した新型コロナ関連資料は、単なる物質的な遺産ではなく、コロナ禍での社会的な取り組みや住民の話し合いを表象する「コト」であり、それが「遺産的」な要素を持つといえる。

つまり、遺産に意味を与えるのは、専門家だけでなく地域住民や未来の世代でもある。したがって、資料に対する意味づけは多様な立場の人々によって行われるべきであり、文化遺産が立地する地域の学校や博物館は、その対話の場となるべきである。このような意味づけの場が、未来に向けて継続的に必要である。

今回の研究会で紹介された事例も、こうした教育実践の課題に対する有効な手法を示唆している。文化遺産と学校教育の連携は、未来の世代にとっての大きな財産であり、国際協力の成功の鍵である。研究会を通じてこの連携の意義を深く理解し、今後の活動に繋げていくことが重要である。

※ Smith, L. “Uses of Heritage” Routledge, 2006

澤之向 達也(さわのむかい・たつや) 岐阜市立加納小学校 教諭／前 白川村立白川郷学園 教諭
小中学校の教員17年目。これまで岐阜県内の小学校3校、義務教育学校1校に勤務。令和3～5年度に白川村立白川郷学園にて勤務。第3～9学年の社会科学習を担当。白川郷学園の特別な教科「村民学」との関連を図った社会科学習を実践。現在は、岐阜市立加納小学校にて勤務。

増淵 麻里耶(ますぶち・まりや) 京都芸術大学 芸術学部 教授

東京理科大学理学部第一部化学科卒業、同大学院理学研究科化学専攻修了。英国University College London (Institute of Archaeology) にてPh.D.取得。筑波大学大学院人間総合科学研究科世界遺産専攻研究員、国立文化財機構東京文化財研究所文化遺産国際協力センターアソシエイトフェロー等を経て現職。京都芸術大学大学院芸術専攻歴史遺産研究領域長、NPO法人メソポタミア考古学教育研究所理事。専門は文化財科学。古代トルコの鉄製品に関する技術史研究のほか、西アジアや東南アジアの文化遺産保護事業に従事してきた。近年は近現代の美術工芸品に対して、材料技術史的観点から調査研究を行っている。

小林 貴徳(こばやし・たかのり) 専修大学 国際コミュニケーション学部 准教授

関西外国語大学短期大学部助教を経て、2020年より現職。専門は公共人類学、地域研究(ラテンアメリカ)。近年の研究テーマは、文化遺産の保全と活用、コミュニティ防災。主な業績は、「観光開発と文化的景観をめぐるメキシコの聖なる都市 Cholula」(青山和夫ほか編『古代アメリカの比較文明論:メソアメリカとアンデスの過去から現代まで』京都大学学術出版会、2019)、「民族学・文化人類学」(嘉幡茂、村上達也編『古代メソアメリカ文明ゼミナール』勉誠出版、2021)、「生活再建にむけた挑戦、野ざらしの復興住宅—メキシコ、被災した先住民村落での聞き取り調査から」(大矢根淳編『復興アダプティブ・ガバナンスの実相』専修大学出版局、2023)など。

丸井 雅子(まるい・まさこ) 上智大学 総合グローバル学部 教授

上智大学文学部史学科卒業、同大学院外国語学研究科地域研究専攻博士後期課程満期退学。同大外国語学部専任講師等を経て2015年より現職。カンボジアを中心とした東南アジア考古学及び文化遺産研究が専門。「遺跡」と地域社会の関係について古代から現代に至る歴史的動態について遺跡地域史と捉え、分野横断的なアプローチで考察。

登壇者プロフィール

五月女 賢司（さおとめ・けんじ） 大阪国際大学 国際教養学部 准教授

英国University of London(LoE)大学院(教育・国際開発修士)及びUniversity of Leicester大学院(博物館学修士)修了。和歌山大学大学院博士後期課程単位取得満期退学(観光学専攻)。ザンビア、英国、セントクリストファー・ネービスの博物館に勤務後、帰国。千葉市科学館ボランティア推進担当、国立民族学博物館機関研究員、吹田市立博物館学芸員を経て、2022年より現職。小規模ミュージアムネットワーク世話人、全日本博物館学会委員、日本展示学会理事、国際博物館会議(ICOM)地域博物館国際委員会理事、JICA課題別研修「博物館とコミュニティ開発」運営委員会専門委員。米・小規模ミュージアム協会賞受賞。専門は博物館学、万博史。

関 雄二（せき・ゆうじ） 文化遺産国際協力コンソーシアム副会長

国立民族学博物館特定教授・名誉教授、総合研究大学院大学名誉教授。専攻はアンデス考古学、文化人類学。1979年以来、南米ペルー北高地において神殿の発掘調査を行い、アンデス文明の成立と変容を追究するかたわら、文化遺産の保全と開発の問題にも取り組む。主な著書として『古代アンデス権力の考古学』（京都大学学術出版会、2006）、『アンデスの文化遺産を活かす-考古学者と盗掘者の対話』（臨川書店、2014）、『アンデスの考古学新版』（同成社、2021）、編書として『古代文明アンデスと西アジア神殿と権力の生成』（朝日新聞出版、2015）、『アンデス文明神殿から読み取る権力の世界』（臨川書店、2017）などがある。

文化遺産国際協力コンソーシアム第34回研究会

学校教育と文化遺産

文化遺産国際協力コンソーシアム事務局

〒110-8713 東京都台東区上野公園13-43

独立行政法人 国立文化財機構 東京文化財研究所内

E-mail: consortium_tobunken@nich.go.jp

Tel: 03-3823-4841 Fax: 03-3823-4027



文化遺産国際協力コンソーシアム第34回研究会

学校教育と 文化遺産



©トラランカレカ考古プロジェクト

2024.9.28 [土]

13時～17時 (12時30分開場)

会場

東京文化財研究所 地階セミナー室
(東京都台東区上野公園13-43)

主催：文化遺産国際協力コンソーシアム、文化庁



文化庁